

THE BOOK REVIEW PRESS

図書新聞

3051号

定価240円
(本体229円)

book



たなか路基 著

▶ 鶴の笛

中小坂鉄山秘聞

1・30刊 四六判288頁 本体1600円

幻冬舎ルネッサンス

時代を大きく転換させる可能性の
あった鉄鉱山採掘をめぐる物語

人物配置と造型に独特の視線を射し込みつつ、時代状況を精緻に描出

村木 哲

わたしが、本書の作者の小説作品に接するのは、『陶匠の血脈』(09年11月刊、幻冬舎ルネッサンス)という丸谷焼の陶工を主人公にした物語について、二冊目となる『陶匠の血脈』という作品もそうだったが、本書もまた、歴史小説の意匠を持ちながらも、人物配置と造型に独特の視線を射し込みながら、背景となる時代状況を精緻に描出していくことによって、歴史的空間を斬新に拡張している。本書の中心となる場所、中小坂は上州・下仁田の北西側に位置する。そこに鉄鉱山があったことは、不覚にも本書に接するまで知らなかった。わたしは下仁田という場所には関心があつて、何十年前にも一度訪れたことがある。駅近くに流れる川に立ちながら、関心の契機となった映画『番掛時次郎 遊侠一匹』(監督・加藤泰)に想いを馳せたことを覚えている。

中小坂鉄山は江戸末期に発見されたといわれる。折からの開国を迫る諸外国に対抗するための武器(大砲)の開発に、良質の鉄鉱石が必要であった。攘夷の急先鋒である水戸藩が、中小坂鉄山に注目したことは、本書の前半部の重要なモチーフとなっている。明治期になって新政府の認可のもと、民間人(丹羽正庸)がイギリス人技師を雇い、溶鉱炉など製鉄設備が建設さ

れ、わが国、最初の本格的な製鉄業の始まりともいわれている製鉄所が稼働していく。だが、それも長くは続かず、明治十五年(1882)、中小坂鉄山は廃業することになる。その間のことを著者は、『鉄山は権力と資力のある者の間を、盗回しにされた暗黒の時代』であったと捉える。確かにその後、断続的に鉄鉱山が続くも大正期に入つて製鉄所設備は撤去されるが、皮肉なことに採鉱が再開されたのは、十五年戦争に入る昭和十年のこと、まさしく戦争の時代であったことを考えれば、暗黒以外のなにものでもないといつていい。採鉱は戦後も続き、結局、昭和三十六年(1961)に閉山したといふ。

本書は中小坂鉄山をめぐる、山師の岩城治兵衛、金穿(鉱山師)の伊佐治(李右衛門)の伊佐治(李右衛門)という存在に焦点があてられていく。そして、その周縁の人物として「山主で中小坂の有力者」西権左衛門、治兵衛の後見人ともいえる政商の鴻池善右衛門、「上小坂村名主」で「砥取・砥蔵衆の元締」永井市右衛門、そして著者が特筆する小栗上野介忠順(幕府へ中小坂に製鉄所建設を建議するも、官軍に斬首される)などが描かれていく。時代は幕末から明治近代という最も苛烈な状況下にあつて、もし本格稼働すれば、時代を大きく転換させる可能性のあった鉄鉱山採掘をめぐる事象を見事に物語化していく。

だが率直に言えば、わたしは鉄山をめぐる攻防劇よりも、権左衛門の末娘・須磨を通して繋がる治兵衛と伊佐治の関係性に惹かれる。

元加賀藩士である治兵衛は、庭師として善右衛門に認められ、資金の援助を受けて鉄山の試掘のため中小坂に向かうところから物語は始まる。治兵衛は、もうひとつの名字という顔があつた。まだ幼子の須磨は、治兵衛を「自分の師匠」というだけでなく、自分を理解してくれる存在として敬慕していた。やがて、めぐりめぐって須磨は伊佐治と知り合い結ばれていく。中小坂鉄山の試掘に失敗した治兵衛は、江戸へ戻り再び庭師として生きていくことになる。善右衛門の仲介で、横浜唐人街で料理屋を営む香港出身の朝鮮人・李雪蘭(原雪絵)と結婚する。雪蘭は四十歳であったが、上州から働きに来た男(勝治)との間に子供を産むも、雪蘭の父親の反対に遭い一緒に暮らすことができなかったという過去を持つ。勝治は子連れで上州へと戻って行ったが、生まれた子は伊佐治といふ、中小坂鉄山の採掘を企図することになり、治兵衛と邂逅する。二人は、ある意味、義理の親子であるとともに、

鉄山採掘を思い巡らす連携関係といえなくもない。

「一服の爽快の気を運んで去って行った伊佐治との別れ際にも、将来異郷の我が子の身に何か変事が生じて、情で我が子を救いたい等と思わないのではあるまいかと治兵衛は案じた。伊佐治が浜を去った後、雪絵は伊佐治は勝治の胤を受けた父親似というより、自分に似ていると言つて満足気な笑った。いいや、俠気の血は確実に父の魂を受け継いでいると治兵衛は反論した。たかたか、雪絵には言えなかった。自分に足りなかった統率者としての危うい俠気の血が、金穿(鉱山師)として、めぐりめぐって須磨は伊佐治と知り合い結ばれていく。中小坂鉄山の試掘に失敗した治兵衛は、江戸へ戻り再び庭師として生きていくことになる。善右衛門の仲介で、横浜唐人街で料理屋を営む香港出身の朝鮮人・李雪蘭(原雪絵)と結婚する。雪蘭は四十歳であったが、上州から働きに来た男(勝治)との間に子供を産むも、雪蘭の父親の反対に遭い一緒に暮らすことができなかったという過去を持つ。勝治は子連れで上州へと戻って行ったが、生まれた子は伊佐治といふ、中小坂鉄山の採掘を企図することになり、治兵衛と邂逅する。二人は、ある意味、義理の親子であるとともに、

(評論家)